みちの

二十四

哥城名ごきの

F V. 40 3

PL788
.4
.G4
1654
vol. 40
copy 1
Asian
Japan
Lage

2004551302

45

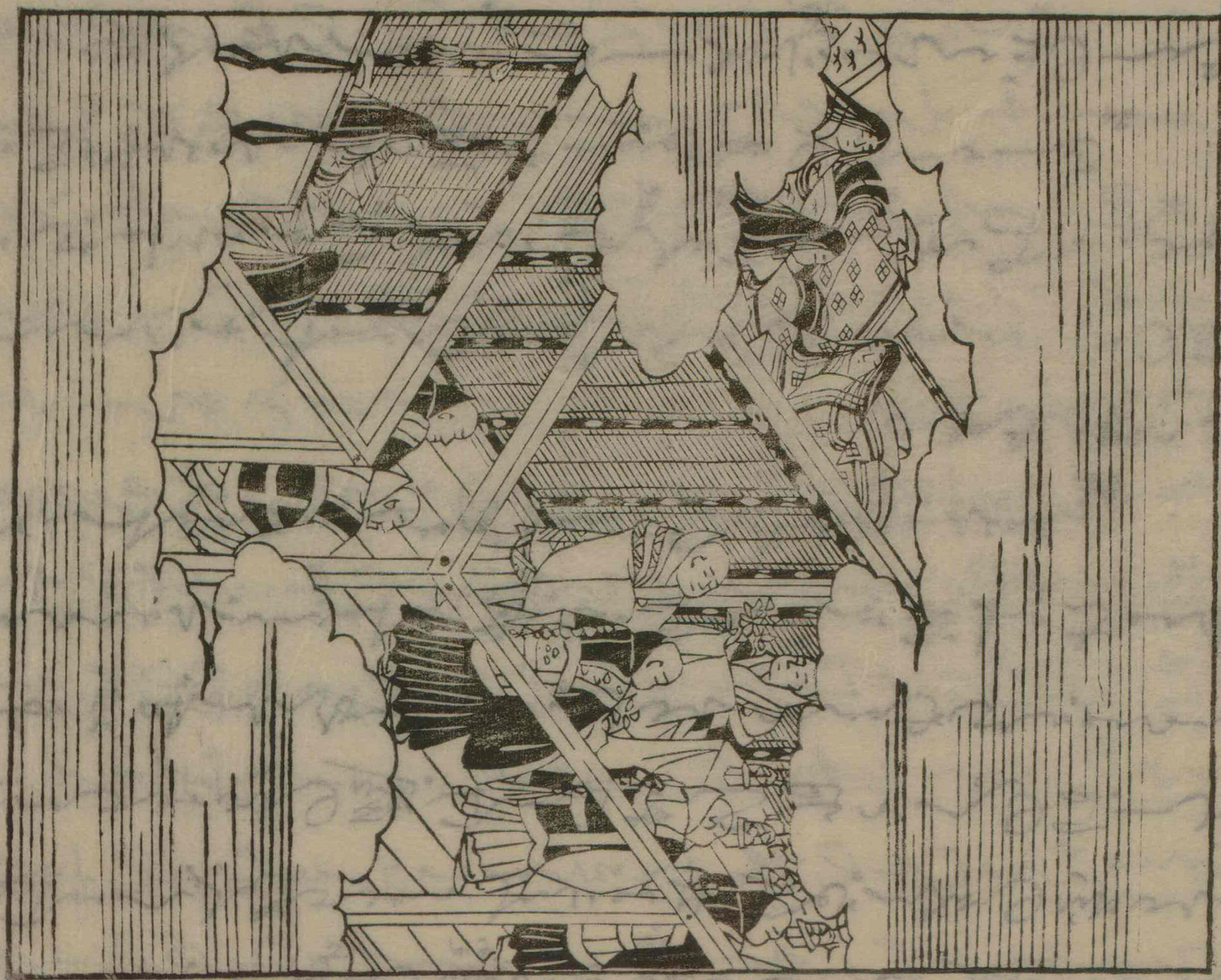
源氏五十一帖の[illegible]
むらさきの上いへまりつひ給しれうちのち、ひとあづちく婦のそこけしきなやみつくり給ひしひさしくなりぬ、いとおぼつかなくまうりハあれど、年月うちなれば、されまりげなくいとどあえうまちりまさりのくへ、源氏院の御まほしちげくく、限なし、おぼしくてもせられさし給へんこともなし、いとどうえくくおほし、げんじこれれちうち給ふ、この世をおぼしめしはなれてうしろめたきほどしづま、まじらぬ身なれば、おぼしちりうけやうぐ、発心まほしうされ命ともおぼされめ、ぞしごろの本意けされたれ、さひちけりそてまつりたまふとのことぞ、

人まれぬれころのうちにも抽あられにおぼされ
けり。後の世のことあるとこそときことにもをおぼく
をきせ給つゝいでなる紙ほいあ家(お家ノ事)さ夜になりまて。
まぼしもうくづらん今の程はをこなひをまぎれ
なくとこゝろなくおぼしのこまへどさ(源ノ)ゆかし
きこし給ひずざ(ふ)なハけがれころまもしかおぼし(然)
そめこうすぢなれば(然ノ)くねんばかりまひこまへ家
けいでにまもうかされておちじ(源も如家はんとく)ほまもいりなんと
おぼをどひとこび家をおこまひなばかりにもこの
世をへりこんといおぼしをきてぞ後の世には
おちじ道(ちゝも)の座(ざ)をかんとちぎりかりしやうしかりて

女（法）志もうしめしくむきてし給けり。門（法ん）が此身なりを。
つゝうろうまじきまやとうしろめてあぼされ
かりさし（法ノ地）げけるくしれ此（ごぐん）朝にてうせなり給けり。
法（かけ）蓋（ほうせん）理千（ぶ）戸いそぞて供（くやう）養じぬふ。門が此とれと
あぼまて二条院にてぞし給ひ。七僧の法（おうぶく）服など
ちれぐ給ひす。ものゝいろぬひめよりまちじめて。さてま
りちうことうぞりなし。おるゝなりごともいと
いうめしきまぎどもをきれしるまゝくしき
き後にまも（法ノ）きてし給ハぎりかれば。（法ノ）くもしきてとぐもむ
りせ給ハぎりけるよ。女（ん）の此なきてりまいてゆ
かく。仏のみまさへうしひ給ひ此ころの御ぞ法。

院(ほ)いいとかぎりなしとこまりまて、おほかたの所
もつしひおまかれことだらりをなんいとなまかを給
けり。示(ぐ)人舞(まひ)人などれことは、大(タ)鳥の恵とりワきて
つうまつり給。内(全)、吉家、ささいの家(扶好 吟花妙法ホ之)たちをたじめ
まりて所なるぐ宴(つく)しこゝまゝ給ひ、ほうまち(捧 抱)など
ぐりのこと紙、うちし給ぐる所をきゝまして
まれこの所いてぞ紙、つうまつる所なけれど、
いとこちたきことぞありいけのほどまいとかく
いろくおぼしまうけんげまいそれかれ世ゝを
へたる所(ぐん)ましやとぞこえたる。茲ちる里と買し
所なる。あしなどもワたり見へり。南東(こゝのえ ひがし)の戸(と)を

あけておりします。しん蔵の西のぬりごめ如かり。
ふるのひさしかり。かるぐの此川ばれどもも。
さうじぐりをへぐそつくしたる。弥生の十日
なれば。菅ざりにて。その外しきなどもうらくな
もれおもしろく。松のおりすなりとゝろのありさ海
をゝらず。さひやしれてことなりゆきこゝろを
なさんさへづゝ紙うしなひ川べし。薪こうさん
ざんのゝ心もそゝしつどひたりひぐき。おどろく
しき紙。うちやすゝそしげまりたりほどぐる。衣は
おほさるをまして。このごろとなりておまごとも
つけてもそろぼそくのゝおぼしまる



あしのはかなさ白ごとしてさてしたまへる

なしかねは身なぐしも限とてたさぬ川さ

なんことれかなしさ此ノ地かへりごろぼそさすぢも

後のきてもころをとれたりけぎまやそこもと

なくぞあめり

笞たさぐこうもひはふをもじめなてこれ

世まねがふ法ぞもうけさ地もすぐらうとき

ことまうちあもをたりつぐこれこもたぎおもし

ろしほのぐと明り和ぼしけ。闇のうちうえ

たり茲のあくなれ去まこころとまりぬべくまほひ

けうてぬちどりの鵜さづかも笛ふえのきねをとしぬ

ひらてぶちどりの嘴なも緒の長なとしれ
心ちして。まれくあそれもおもしろきものこしれ
ほどまれうひの舞(まひ)てきうまあるほどの。すき
つるのぐさなやかにまぎさしく。すゆるに。
これ人のぬぎかけたるもれいろくなども。地のおうし
まおしうのこゝろも。みそちに遊アの中にも。地のぶ手(ざ)
どもてのこさず遊(あそ)び給。かこしも心ちよげに。具(けう)あり気也
どもお(洪ノ)紙こ給にも。掛(ぬ)りすくなしとも。そしたる。
れこゝろのうちにはよろげのこと衣におぼしたまふ
昨(に)日例なしずおきねさをかへりしかたにやいと
くるしうてかしかへるさしどろかな地乃おなも
ごとまゝあり例どひあそびかふ人ぐのれかうちも

さ夜のなれがぞくざえどもこと笛の音をもかしや
きくのべきとぢめちかしんとのゝ却げさかれど
こしもめとまろまじき人のかゝどもくおかれこ
まるされ給ひして夜冬の時まつけろ遊び
こゝふれまもお夜いどましきしるのころいをの
づくこちまじ里もすしめどさすがまちさけを
かしのふかるぐい誰もひさしくとまるべき
世まはあらざるれどまづまれひとりゆく忘しぞ
なりちんをおげしつぐくろいうじう衣ありこと
こそくをれがぞくへり給ちんとすりもとをき
もれめきておしまる茶ちる里のれかるま

<ruby>
<rt>笠</rt>
えぬべきこのりなどぞこれまるく世こゝ
とむすぶ中れちぎりをれかへり
<rt>花ちる</rt>
むすびをくちぎりは絶じ大かたの縁りすく
ちるきれ法ありともやがて此つゐでにぶんの<rt>ど</rt>縁<rt>こゝろ</rt>
をんぼうちぎこゝろにあくこゝときゝとぞをきさせ
ぬふこゝぞ法をとゝなりしもこゝろで行へぬれば
間のことに成てうちもへさるべき事ぞなどまてぞ
きさせ給けるなりけるなりてもれいのあけさり
さへいとゞきし入ぬめべきありくおほうなそのこ
とくおどろくしかしぬれこうちなれどこゝ
いとよいきさ後になりこまへれがむけりしげ

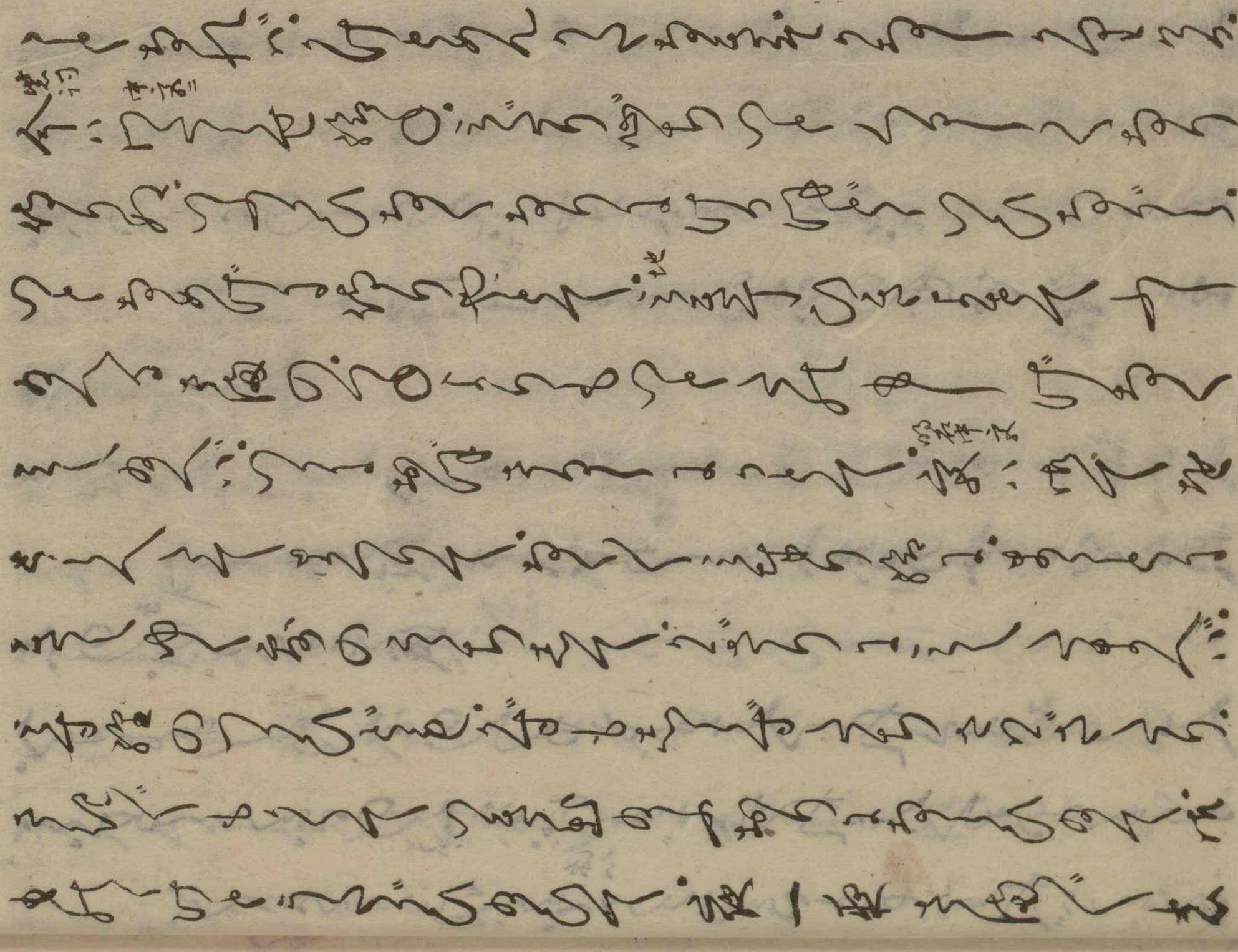
所をくるやこ給こともあるしさふふ人ぐもいかり
おりしまさんとすりまかとしひよりまも。まげかき
ろしあそしうりあるしきれ名さ面とこまる。
りくのこおもすれば。中宮（明石の御宮に初て中宮と云り）この儀にまうでさを給。
ひんぐしのこいにおりしますべかれど。こちくに（二条院にそこ）（紫ハ西射之）
もる物さてしまふ。紙（ぎぐ）式（しき）など例にかりしほど。この
世のまさ面をこそてぞ此ぬりなどのこおぼ（紫ノ）をば。
よろげにつけて物長なり。名（な）射面（ぐじゑん）をさく（紫ノ）給にも。
その人かれ人などこくとぐめてきれ給。上達ア
などいとおほくつうしまつりたまへりひ（明石中宮ノ）さしき
右射面のとぐしをめぐ（紫ノ）しくさしてぬ物紙

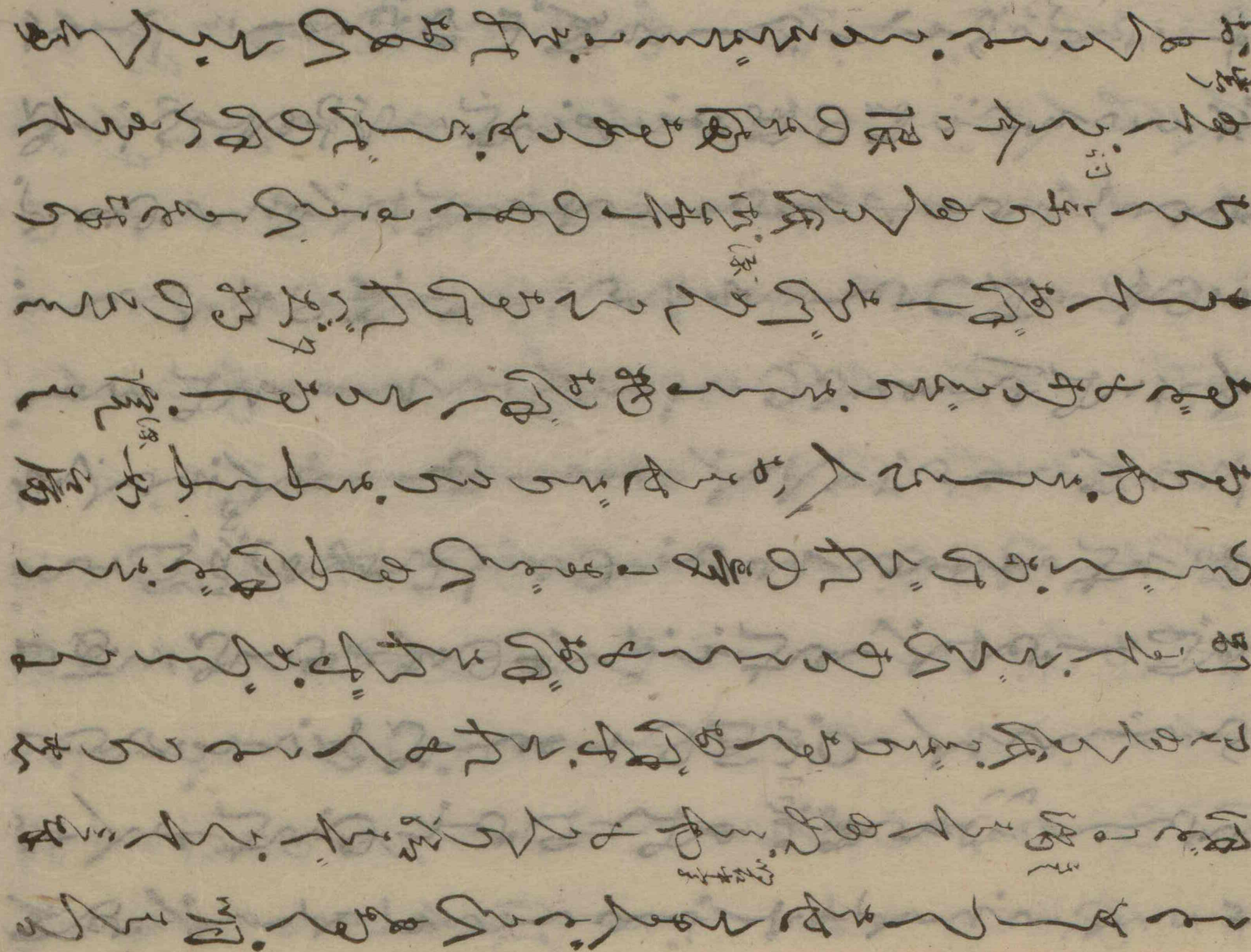
世のつねのあさき縁をなほとゞまらずくちなす　歌
抑しおもはゞおもふの縁なしとうけもひへ
あまぞこしとは出てんらもあそれは抑ころ
ばそきれ名しきは志うらうて名今上ノ家ちとこなら　紫ノ
ねみても思はれくのはゆくする恋をゆうしくも　詞
男けうこそうくもれらけり身をおもしむ心の
まづまけりまやとてあらぶぐゝのへ歌れりかの
こほひいらじう思しげるりうらじうのこ哀し　嵯峨中書云
こうんとおぼすま中家うちあるさかぬゆゝしげる　紫ノ　紀
あだいこゝてあらし縁りすまみくつあそあだまぞ　紫ノ　紫ノ御心ざし
年比つゞきまうりあれくうひとくのとゝあす　詞

まゝべなりとおもしげなるがこれ人〳〵ゆかず
ありさんのちまれこゝろとゞめてぞ○おもはを（明石中文ノ）
あぢきなうさて給けつゝど経あまりてぞ。（明石中文季次後頭之地）
れいのつゞれすまつゞり給。三の家もおもへまゐれ（明石中文　不対之）（白）
中よびとおもしげなりてありさまあはれこゝろの（述ノ）
ひまよはゞまへなりまそゞ人のさゝめまよ。
（詞）まろが御らんぜんまゞ覚しもあんやと思ひのへだ。
（白詞）いとゞ思しうちゐんまろいうちの人へよりもこゝや（仝上）（明石中文）
うりまげゞをそまさりてぞひ字ゆれおいせずを（述ノ字）
心ちむつしうちゐんとてめをすりまぎらし
かへるさ夜おもしくれば御思ひこちずしあまくれ（述）

嚴(おち)ぬ(詞)おとなる女のひなげ、うゝますゝなて、これ
さいのまへなる紅梅といと様とは、菊のありくま
うゝとぐめてもてあそびぬへざるべからんありも。
仏にもなりぬへとこさしさまへが(句ん)打うなげさて。
ひかとまもりてなこゝのおけべかれば、立て
おりしぬどり(法ノ句と)つさておつしさてなりぬへれば
このこや(句)と姫(女一文)家とをぞこさし(法ノ仏)さて給へんこと。
口おしくあれなりおばされける秋約つけて。
世中すこし涼(すゞ)しくなりて、此心ちもいさゝか
さはやぐやうなれどなほとすれば、ぐとがまし。
さるは外にしむどうりおばさるべき秋風なるほど

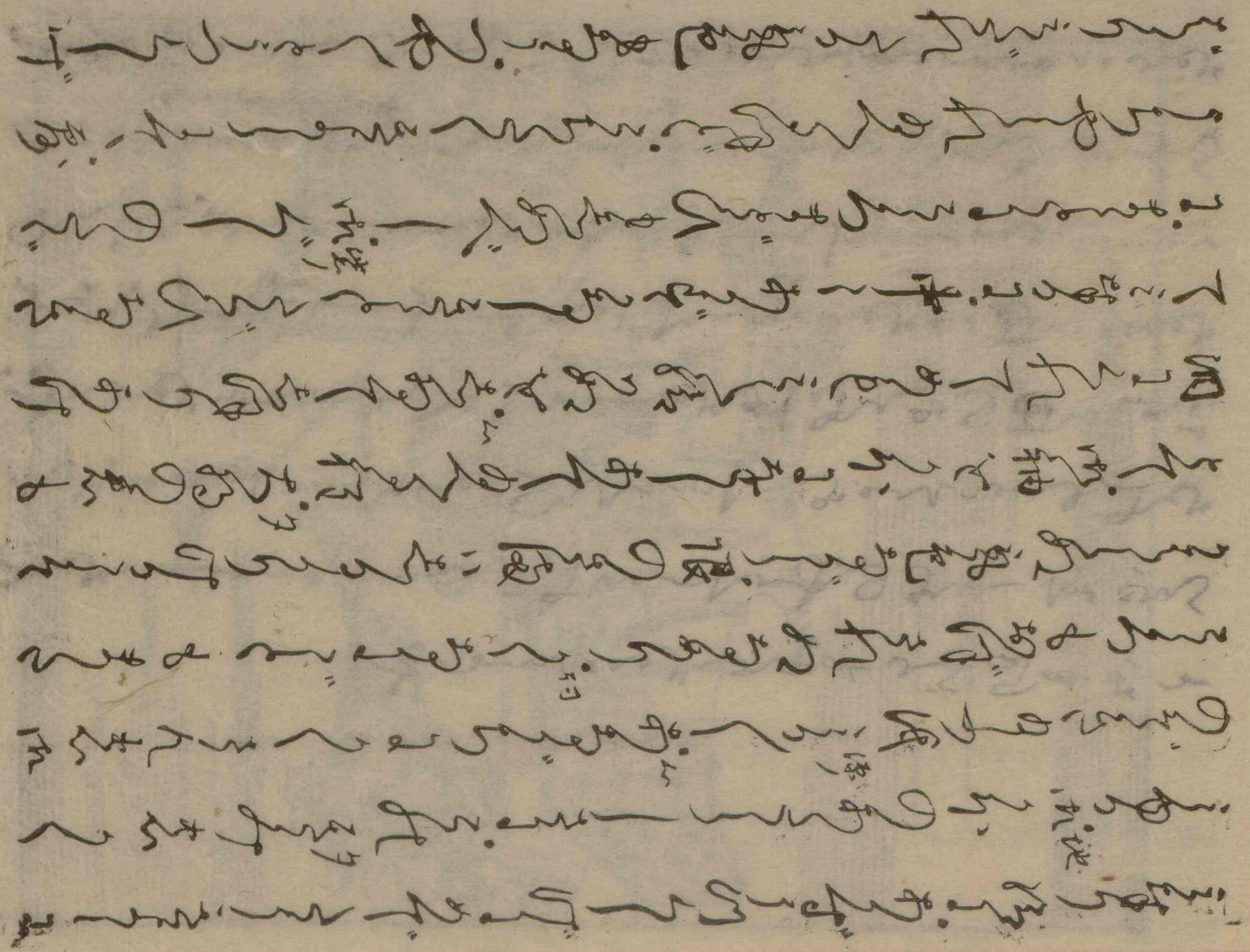
まもまゐられぬひしと限もなくうらめしげに
おしげなるに涙まそへいとゞりそめは世にぞひ
めへるしさゝゝる物あかく心ぐるしくすゞろなる物
かなし風すゞしく吹出るにも暮のけしきはさんざいに給
とぞけうそくまゐらせめへるを院にてことあり
のぞみはいひとゞくおほさぬおほんめてはこれおほまん
まそはこまなくすぐれてこゝろもそれぐしげなあり
しとこゝてぬふうじゃうのひまあるをもいと
うれしとせひこゝてめへる侍ぬしまぞ給も
こゝろぐるしくおぼいつる嵯しきはげんとさま。
おもしろかれど



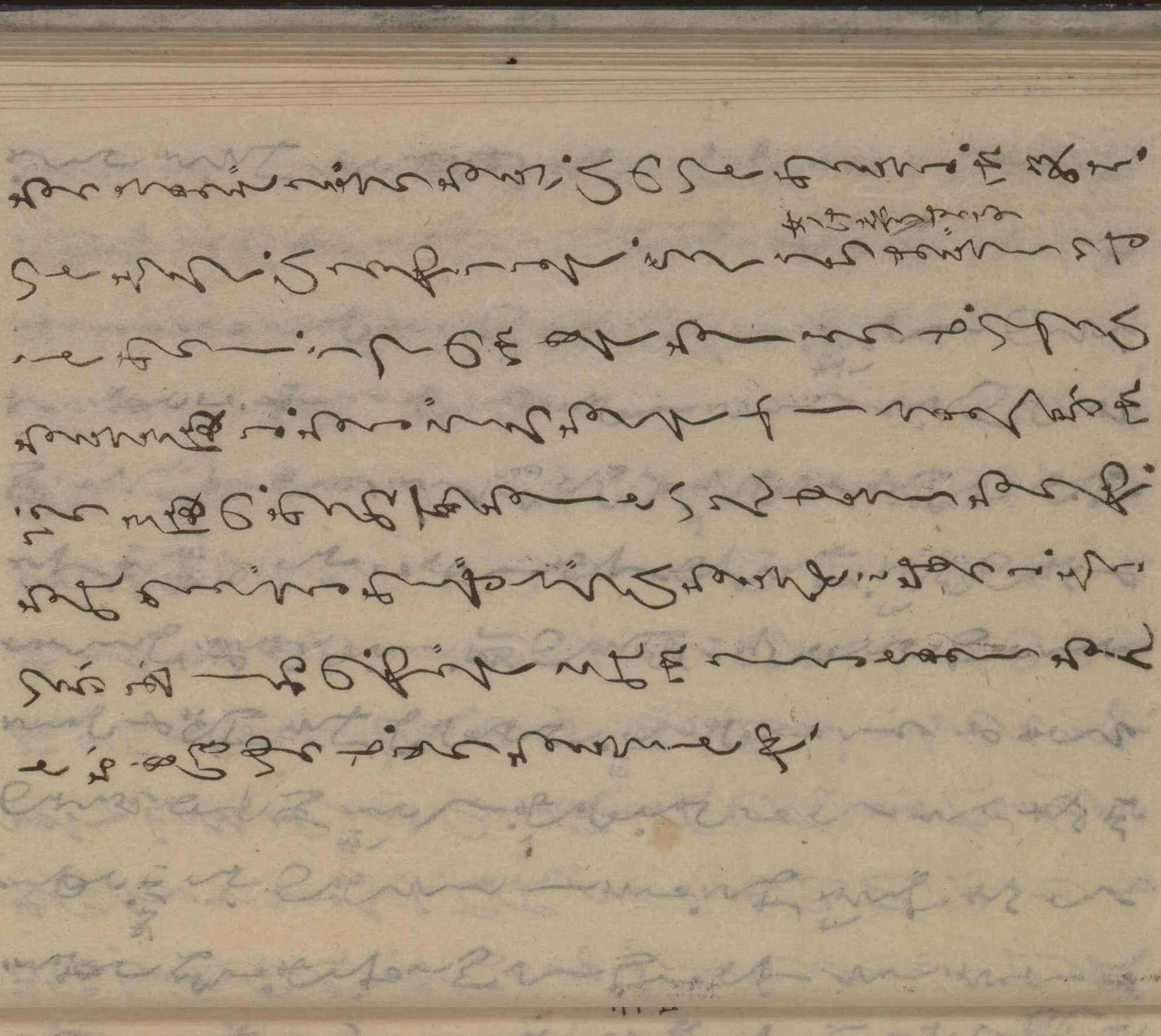


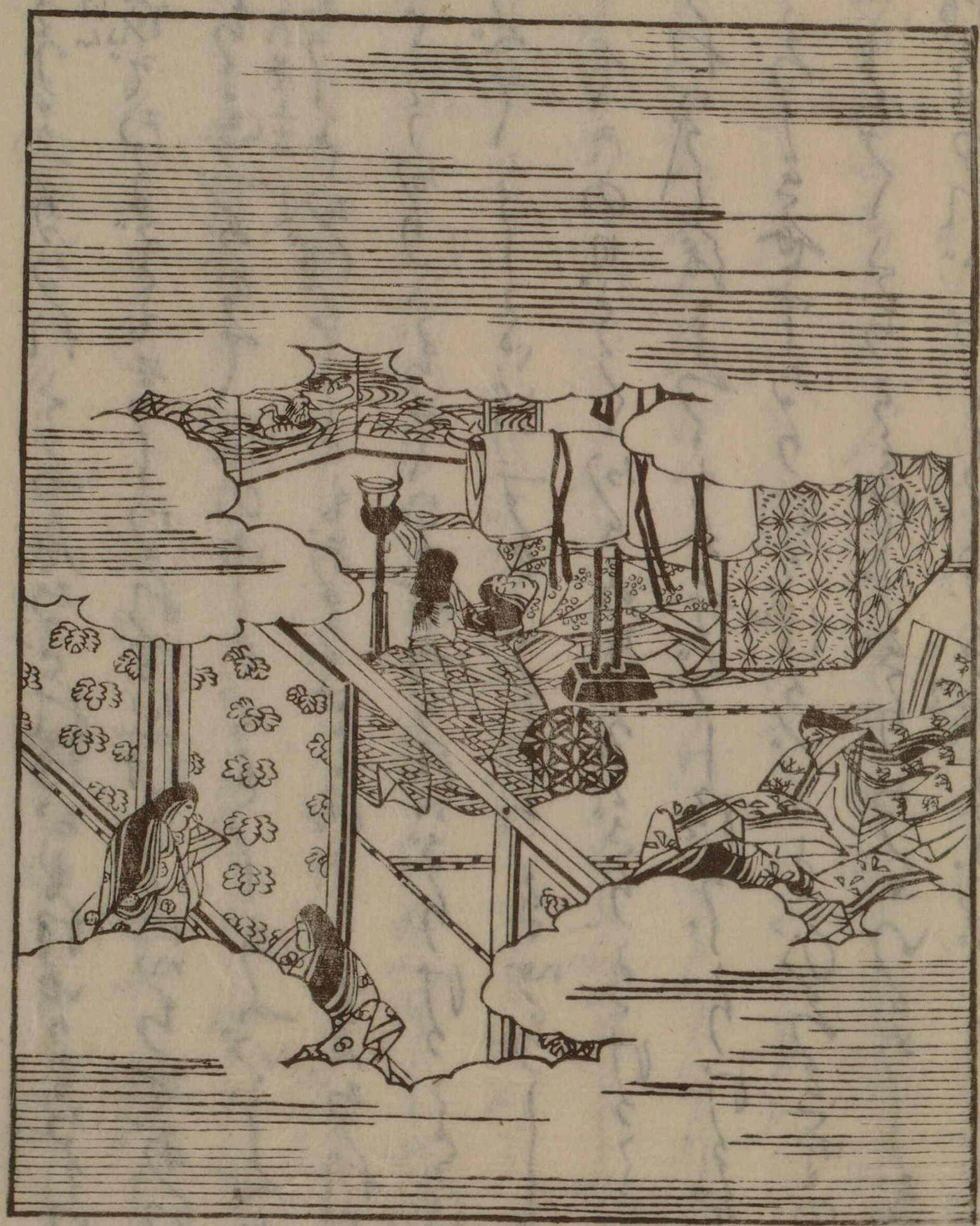
やえなんかいとくおしき紙。此かぶ(ぶ)りしさふしふ
ぶとうちど經の僧なども。これこ忌やめていでぬ
なめりせ。さりともうちとまりてもれすべきもあらん。
この世にはひなしき心ちすりを。仏の此志りし。
今ハかれかしきたのとふしひまぐるこれこそ
べき紙。しらおろすべきうしぬ人。さるべき
僧これかとまりうるなどのなふ此気色。心(地)げらく
おぼしなすべかれど。此かの女もあらぬさ海に
いとじくくへか。此泪のとましぬをことちりに
なりしくうまり(タノ)給。此(羽)もれしけなどのこれも人さ
れこそうぐらんとて。かうことも見まべ事紙

なりしうどいうちゝん世なりありしだうりも
こまとんほのうちも此(笠ノ)しゑをとゞまるぬことなど
こゝにもたゞれずおもひつゝりつゝもれを声も
つゐるきうせ給いぞちりぬるうしそいあめれ
ひなしきれうしまても今てゝびこまとんの心ざし
うちつべきおりいゝぐいまよりほうり。いうでゝ
あんとせよつこもあへずちゐれて。如房のある
限さけぎまぞつ紙。あなか夜しばしとしづめがね
まて。此事のうゝびし紙。もれの給まざれにひき
あげてこゝまへいほれぐとあけりひうりも
おほつゝちけれいおほとゝおぶしちくくげて



こなり給ふ。おぼえ給ひしげるめでたうこそしこ
こゆゑ。此地かのあたらしさ。これ夕みむかく
のぞきのつ浜こうく。ふおもがちなかくさんむ此
ころもおぼされぬなめり。何かくなるごともまる
かたしぬ気色ながら。恨のさ夜いとゞりけるこそ
とて。此袖をかかるをしあてのへる程。夕ぬの君も
泪にくれてめもこゝ結ぬを。ふもゆりあけ
てこなるに。中々あるぞなしきことぞひなさ
に。まことなこころまどひもしぬべし。此坐ノぐしのこぐ
しちやられのへるほど。こちたくきゝしまそ、夜
ぢうこぐれころ気色もなう。つやくとうつくしげ





地つうまつりなれたる女房などは抱おもほゆるもなれ
ば涼んぞなるよごとも見しつれずおぼさるゝ心ちをおれ
がちなさづめなて恨のあることどもしあふいうしへも
多行葵上花つがえ
うなしとおぼすことも思まゐこゝ給し御力なれど
いとうかりこちてはまぐさしり給はざりけることは
すべてきしこゝしすゑこゝひなき心ちし給
やがてその日とくおきめなりかざりをけること
なれば代ゝ紙こゝもまゐすぐし給まゞりけるぞ
こゝろうき世中なりけるけるぐとひろき喰の
所もなくこちこゝそかざりなくいつめしき
さほうなれどいとゝもうなき蝦(ゑゆり)まてほどなくのぼり

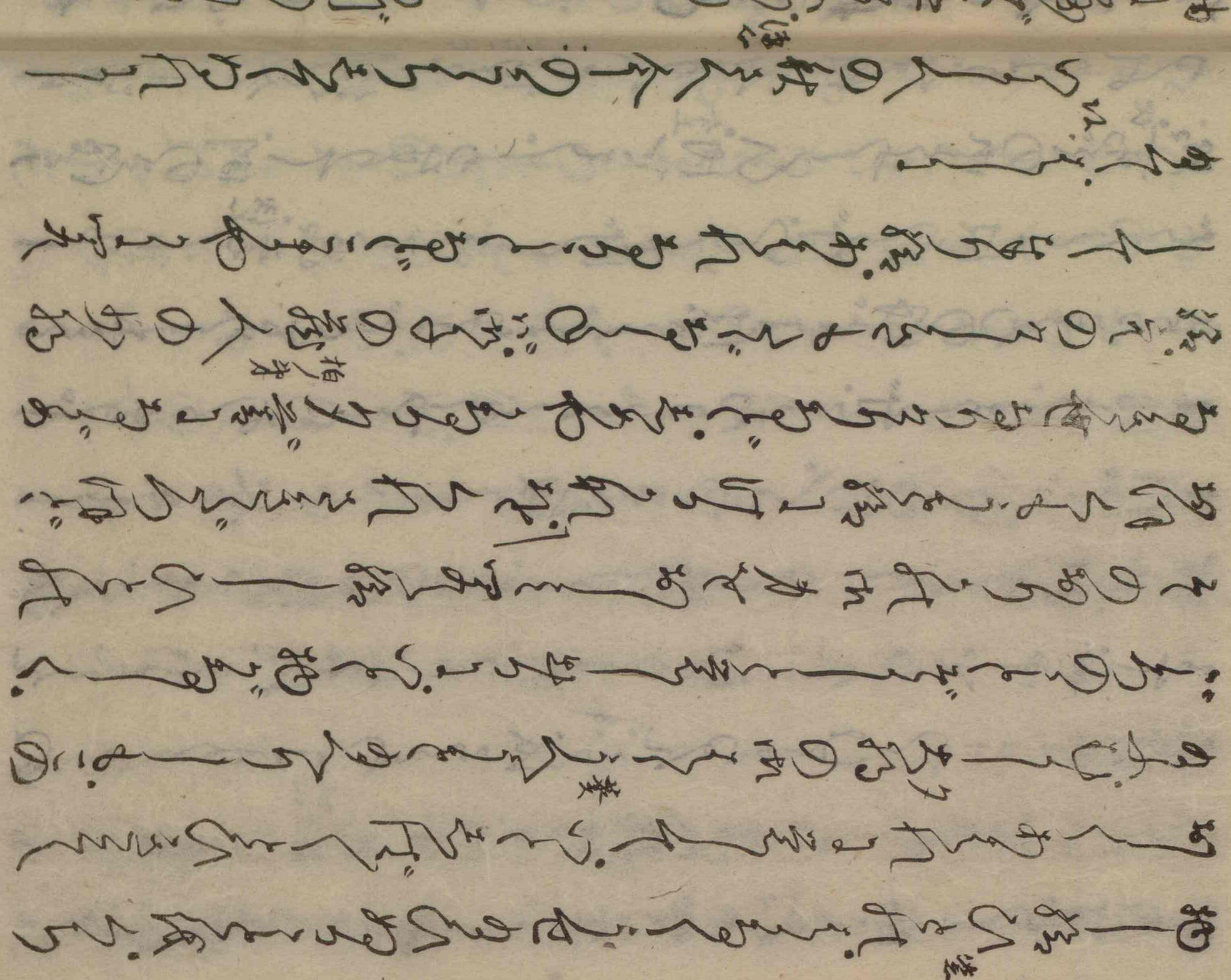
[illegible]
絡ぬるもれいのことなれどあへなくいとじ。中(保)を
あゆむ心ちして。人にかくまてぞなりしまし。けり
はこそまつる人もさばかりいつしさ出身をと
地のころしてぬげすきへなるぬはなりなりけ
とくりの女体にまして夏(ゆめ)路(ぢ)にまどふ心ちして。
くる夜よりもまろびなちめべきをぞ。もてあつかへ
けり。(添ム)むし(タ)大ねのしれ(菱)れもしぞうをのへりし時の
あり月をさひ出るにも。かれはなれもれ(ぬ)ばと
けるにや。月のかのあさしくに見えしをとあつ
こゞくれまどひぬへる。十四日(ぢうしにち)ようを(菱ノ)をもてこれ(塗)も
十五日の曉なりなり。日(地)はいとしもなやかりさし

わぐりて、昨遇の事もかくれたる人なくて、世中
きしつぐらるにいとゞいとゞしくいうじけれど
とくるとてもいく世かはしべき。かゝ事なるしさの
まぐされにむしかしよりのれはいもとげまかしく
おもはせどこころよはさ後のそしりをおぼせば、この
ほど紙すぐさんとし給ふ。腕(片)のきさあぐるぞうん
ぐさうりけり。大(タ)物の表もれいうりこもりもすてお
りしき面にもまうで給ふ。昨日言ちらくさふしひ
て心ぐるしくいうじされそしさ紙ことゝいりに
なるしくこまりまて。よろげにあぐさめ冥れなる
風昨日ぞちて昨夕言ふ。昔のことをしいでゝ

ほのまこそまつりし物をと。忘しく覚し給ふ。
又かざりのほどのゆめれこちもしなど。人もれぞ
もひつゞけ給ふ。さへがくるしければ。人めなは
さしもこしじとつゝみて。阿弥陀仏(あミだぶつ)くとひさ
給ずゞのゝずまもまぎらかしてぞおもふぞのみもも
てけち給ける

(タ)いまし人への秋のゆふべの忘しさにいまもと
こゝろしあけぐれの夏ぞおぼりさへうるはけ事。
(比)やんごとなさ給どもさふらいをめて。さゞまりこゝ
念仏をぞさるゝれまて。法(ぞけ)華経(きやう)などずぞきを給ふ。
かゝいと哀なりふ(ほん)してもおきてもおもふぞのひる

君にも入がくやとやしまし紙このゆひすう
なれめにますれさせめへと。つうぐ（ぞけ）仏（れん）を念じなり
給。（地）前ぐのれとふしひ。（金上）内をもじめなりて。例のさほう
ぢうりにはあらずいとしげくさてし給。（ほん）意しめし
ころころのほどにはさしにあるまごともめにもこそ
にもとゞまらずこころにかうりぬふとあるまじ
それど。人にぼけぐしさき後にしじ。今さしに
我世れすゑにまくくあしくこころにはさまどひ
にて。世中をあんそむさにけるとおぶれとゞまらん
名紙。笑しつくむにあるん。三紙こころにまるをぬ
あげさをさへうちそへ給けるちじのあとゞ（ほん）義をも
ありすぐし給ちぬれ心にてかく世にうぐひあく



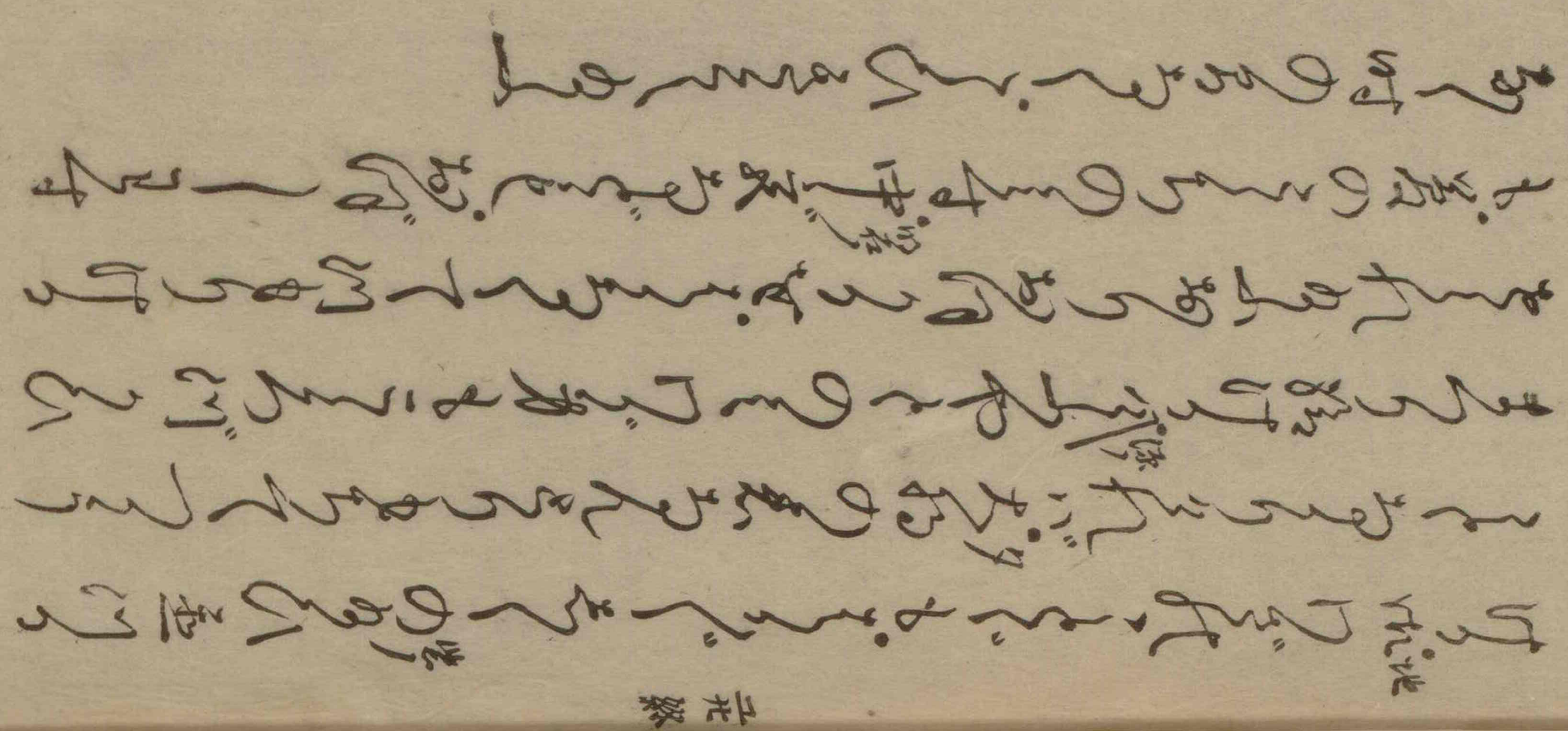
袖に露ぞ玉ぞよかりうしこころけのかうこと
かげしほれておもとさすゞ秋のよ哀しう
うきおつめゞげつゝあるゝゞをもひまあへ給ふめ
まうゞれては成色し
哀けさはさしゝまともおもほしすたゝる
秋のよそつゝされ。まのくこゝあしされこゝろのかす
あしゞ。まちとゞり給てもこゝろにはくまとゞめとゞめ
めけべきおとゞのれこゝろゞ侮あれゞめやすきほど
ようゞびくのゝ紙ざりあしぬれとおもひの。うき
あかりめうしく悦びここて給ふ。すことの給し
よりハ今すまうしこ侮やのまてさまうれり。世中よ

さいまひありめでたき人もおいなう出るのせに
そ○まれらさまつけてもこころのぐりとぐりて
人のこめくりしさ人もあるをおやしきまですぐる
なる人にもうけられ（うけひれたる）たるなく志いで給ともなる
ことにつけてもせるほめられ心にくくありふしに
つけてらうくしくありがたるしひとれ
れこころぞんなりしさしもあるまじきおほよその
人さんそのころは風の音出のこゑにつけてなんぞ
とさぬはなしまして御のうにもそそまつりし
人のせひなぐさむべき世なしとしばむつましく
つうまつりなれたるひとぐしさぞしも御れる命

うらめしきことはなげきつゝおはしますこの世の
ほだし山ずみはなげきぞひたるもありがたく冷泉院の
秋好ちうぐうの宮よりもおそれあはれせうそこきこえず
つきをみしとゞもみてかひて
秋好御れいもつゝ遊べをうしとやおもふ人の秋は
こゝろをとゞめざりけんいまはことしもあはれ
給ぬるときけれは。源に御おぼしぬれはこゝろもとうち
くへし重ぐくこ給。いつくひありおもしろくん
くゝのおぼさまは。この秋好宮ぞこそおりしりたれ
とぶらうあはれまさるやうに見しつゞけうも。
涙のこぼるゝを袖のいと海あへさやり給はず。

のぼりましくもねあがらもくりこよ見れ
あきまてぬつゐなるぬせる地をしつこめてもと
ぢりおながめておりす心くよくまもおぼされず
これながらこれほうほれぐしく覚しさら
なることおほうまぎらしに女ぐるまぞおりし
ます仏の此前に人しげうずもてなしてのど
やうをこゝろひ給ふとせをもろともまと覚し
しらと恨ある別ぞいとくちおしきわざなりけ
今はたちすの家もこゝくにまぎらまじく後の
世をとひこゝちにおぼしろことゝゆゑなし
されどひと字をまぐらしまふなん おぢきなり

二九終



69038
6AP78